



## 「国民」と「移民」をめぐって：国際社会学から見るフランス



鶴巻 泉子（文化動態学）

「国際社会学」と呼ばれる分野で、主にフランスをフィールドとした研究を行っています。フランスが「移民大国」であることをご存じの方は少ないかもしれませんが。しかし国勢調査（INSEE 2008）では国民の5人に1人が移民出自とされ、若い世代（15-34歳）では3人に1人という推計もあります（OECD 2013）。

日本でも、外国籍の親を持つ人々の活躍は目覚ましいものがあります。ざわちん、渡辺直美、高安関、ダルビッシュ …そして私たちは、あることに気づ

かされます。日本で生まれ育った人なら、外国籍で「アフリカ系」でも、アメリカで生まれ育った「日本人顔」の人よりよほど日本語が上手く「日本人らしい」、と。以前なら「出生国」=「国籍」=「国の言語と文化を身につけ、マジョリティとエスニックな特徴を共有する」ことは、個人の属性に於いてイコールで結ばれていましたが、この関係は必ずしも成り立たなくなりました。

この現象を、「グローバル化」や国際移住の発展と結びつける方もあるかもしれませんが。世界では確かに移民流入を危機と捉え、国家の一体性を弱めるとして、それに反対する政治勢力が進展しています。しかし、「国民」と「外国人」の区別をどこに引くか、「国の文化」をどう捉えるかは、国民国家の誕生以降、常に議論の対象となり変化してきました。フランスは地域の征服と統合の結果、領土統一を果たしましたが、その過程で他言語・文化は「野蛮」「外国のもの」として否定され、「国民化」、つまりマジョリティ文化に同化されていきました。植民地時代には現地住民を国民とする教育が行われました。移民の多くは旧植民地（特に北アフリカ）系で、祖父や曾祖父が仏軍兵士として戦った人も、独立派として仏軍と戦った人も、含まれます。歴史を考えれば、簡単に「国民」対「移民」の線引きをすることも、グローバル化で突如生じた軋轢と捉えることも、できないのです。（写真はストラスブール市郊外ニューオフ地区グラフィティ）

分野・専門紹介—File21

## 日本文化は「日本人」だけのもの？

分野・専門名：日本文化学

日本文化は日本のみでつくられたものではなく、また日本人だけのものでもありません。日本文化は東アジアをはじめとする国々の影響を受けて発展してきました。そしてアニメやマンガなどのサブカルチャーは海外でも人気を集めていますし、日本語で小説を書く外国籍の作家も多数存在しています。日本文化を狭く考えるのではなく、幅広い視点から学ぶことができるのが、日本文化学研究室です。

【学生の研究テーマ】

学生が研究しているテーマは、源氏物語から東日本大震災後の文学まで時代は多岐に富んでいます。そして日本と中国の現代作家の比較研究や、かつて日本が植民地にしていた「満州」の研究なども行われており、



国境を越えて日本文化を幅広く捉えることを試んでいます。

#### 【院生生活】

他大学の先生をお招きするセミナーが定期的開催され、年に1度シンポジウムや他大学まで出かける合宿も行っており、とても元気に活動している研究室です。研究室には常に在室している学生が数名いるなど研究に対する好奇心も旺盛で、自主的な読書会も行われています。

#### 【ポイント】

名大のなかでも学生が多い研究室で（博士前期・後期をあわせ30名以上！）そのうち半分は留学生です。そのた

めいろいろな人からさまざまな意見がもらえますし、留学生が自分の言語を教えてくれる勉強会や「国際料理文化研究会」と題した食事会も行われているので、日本にしながら他国の言語を学んだり、料理を食べたりして交流を深めています。

（加島 正浩・博士後期課程2年）

#### 分野・専門紹介—File22

## 名古屋で留学する

### 分野・専門名：東洋史学

東洋史学といえば（日本以外の）アジア各地域の歴史について学ぶ分野で、いわゆる「外国史」の一つにあたります。——ですが、これが最近は少々怪しくなっている気がします。というのも東洋史学の学生、特に大学院の学生（「院生」と称します。ちなみに大学院に進学することを「入院」という……というのは嘘です）はここ数年、その多くが中国からの留学生に占められているからです。私

は中国民族史（中国のさまざまな民族の歴史。漢民族も含む）が専門なので、それに関する中国語の論文を授業で読むことが多いのですが、その中の「在我国…」という表現を、日本人学生なら自然に「中国では…」と訳すところ、留学生はそのまま「我が国では」とやっちゃって、お前は今どこに居るんや、となることもよくあります。

ところで東洋史研究室にいる留学生は、中国から日本に来て中国の歴史を勉強しているわけで、そのことにどういう意味があるのかを、卒業するまでにはかならず考えてもらうようにしているのですが、だったら日本人の学生が外国史を学ぶことの意味を普段から意識しているかという、そうとも言えない気がします。ここでもあえて私の考えを押しつけはしませんので、歴史研究を志す人もしない人も、ぜひ一度考えてみてください。ともあれ授業では、なにぶん受講生の過半数が留学生だったりするので、教室内に中国語が飛び交うのもしばしば（気がついたら私も中国語で説明してたりする）。逆に日本人学生が、名古屋にしながら留学気分を味わえるかもしれません。

（写真は雲南東北部の豆沙関にて。紀元前に開かれた五尺道（手前）から、21世紀に開通した高速道路（中央奥）まで、二千年間の交通の変化を一望できました。）

（林 謙一郎・准教授）



#### 最近の文学部

### 満開の桜の下で

この号がお手元に届く頃は、大学は元気な1年生で賑やかになっています。最初の難関の1つは英語以外の第2外国語の選択。2年生以降の専門の勉強にも関わる大問題です。冒頭の写真の壁に書かれているのが何語かわかりますよね！一年間の履修で、これが辞書なしで読めるようになるはずです。（YK記）

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...  
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）